



写真スライド室では震災直後の街の様子や人々の様子を見る事ができます。



吹き抜けの天井には、当時インドネシアを支援した59か国の国旗が掲げられています。日本の国旗もありました。



絵画で見る津波。当時の様子を描いた絵画が展示されています。津波で逃げ惑う姿など、災害時の恐怖がリアルに表現されていました。



被害を語る模型。スマトラ島沖の震災では津波前に起こった地震でも多大な被害を受けました。模型の展示室ではその時の地震の様子もわかります。

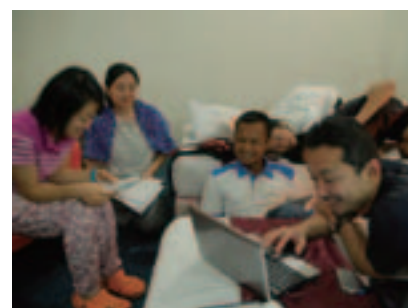
研修生によるプレゼンテーション①

in 津波ミュージアム

スピーチ&プレゼン * - - - - - *

研修生は渡航前からA,B,Cの3つのグループに分かれ、インドネシアで出会う人達に自分達の故郷や東日本大震災の事を伝えるべく、プレゼンテーションの準備をしてきました。

限られた時間の中で、自分達の伝えたい事を出し合い、まとめ、発表資料を作り上げるのは大変な作業。代表者のスピーチやグループでのプレゼンテーションの準備は渡航研修中も進められ、練習は深夜にまで渡ることもありました。



(写真左)
通訳のアハマッドさんと一緒にインドネシア語のスピーチ練習をする松澤広夢
(写真右)
スタッフと共にグループプレゼンテーションの準備と練習を重ねる研修生

* - - - - - *

津波ミュージアムでは、Aグループの5名がスタッフの皆さんに向けて発表しました。まずメンバーを代表して松澤広夢がスピーチを行い、その後、映像やスライドを使ってグループでのプレゼンテーションを行いました。

松澤広夢スピーチ



(インドネシア語) Semuanya, selamat siang. Nama saya Hiromu Matsuzawa. Siswa SMA kelas 1. Terima kasih sudah meluangkan waktu ditengah kesibukan anda sekalian. Rombongan kami adalah korban TSUNAMI yang terjadi pada 2 tahun yang lalu yaitu berada di Kabupaten Iwate Jepang. Tujuan kami datang ke Indonesia adalah ingin mencari solusi bagaimana membangun kembali kampung halaman kami. Pertama kami akan menceritakan peggaraman saat TSUNAMI itu terjadi.

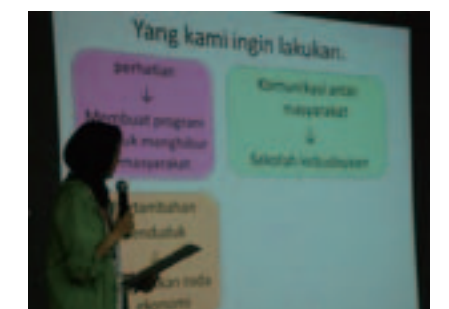
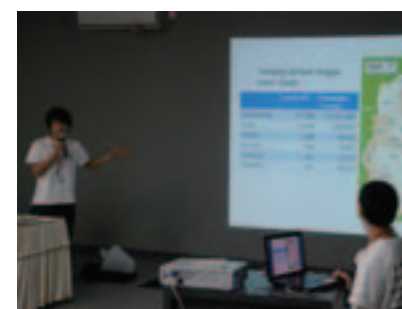
(日本語訳) 皆さん、こんにちは。私は松澤広夢と申します。高校1年生です。今日はお忙しい中お時間をとって頂き誠にありがとうございます。ここにいる私たちは一昨年の3月11日の東日本大震災で甚大な被害を受けた日本国岩手県に住んでいます。私たちは、私たちの故郷の「復興」へのカギを探すためにインドネシアへ参りました。それではまず、私の被災時の経験をお話したいと思います。

(以下日本語でスピーチ)

2011年3月11日、あの時僕は高台にある中学校にいました。体育館で一晩過ごしました。電気もなく、夜は寒く皆で毛布を分け合いました。余震もあり、怖くてほとんど眠れませんでした。夜が明け、自分の家に帰った時、僕の生まれ育った町の風景は一変していました。大量の瓦礫が道路をふさぎ、たくさんの家が流され、車がひっくり返っていました。僕はそれらの光景を見た時驚きで声も出ませんでした。僕はその後避難所で一月生活しました。避難所での暮らしは大変でしたが、当時、中学生だった僕は中学生としてのボランティアができました。毎朝朝食に使う水汲みをしたり、幼稚園児や小学生の遊び相手をしたり、各地から届いた物資を避難所に配給したりしました。自分が避難所の一人として同じ避難者の人たちの役に立てたことがとてもうれしかったです。避難所生活が終わり、中学にも普通に通えるようになりました。中学校では仮設住宅に住んでいる人たちにボランティアをしました。ボランティアでは物資の配布などをしました。

Aグループ プレゼンテーション

Aグループは東日本大震災で起こった実際の津波の映像を流し震災当時の事を紹介した後、現在の自分たちの生活状況を踏まえて、今後はここでのケアを中心とした復興活動が被災地で必要とされているという見解を述べました。



渡航研修3日目の3月18日(月)、スマトラ島沖地震から8年の月日が経過したバンダ・アチェが現在の様な状況なのか。果たして、「復興」は成し遂げられているのか、研修生たちはその答えを探さべくかつての被災地であるバンダ・アチェの街を回りました。



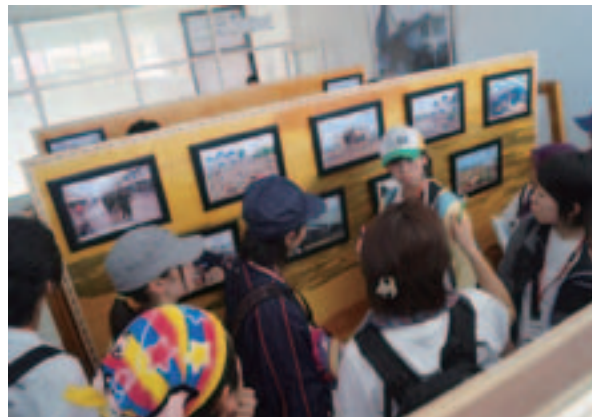
Mesjid Baiturrahman ~バイトゥル・ラフマンモスク~

バンダ・アチェの中心部にある「バイトゥル・ラフマンモスク」(※モスクとはイスラム教徒の寺院の意)。海岸から約3キロ地点にあるこのモスクは震災当時モスクの1階入口まで津波が押し寄せました。このモスクには多くの人々が津波から逃れようと駆け込み、屋上へと避難しました。現在はきれいに整備されたこのモスク敷地も震災直後は悲惨な有様でした(写真右)。現在もモスクの中では沢山のイスラム教徒が祈りを奉げています。



Kapal Lampulo ~カパール・ランプロ~

震災の津波によって海から内陸に運ばれた漁船「カパール・ランプロ」は周りの補強工事を行い、現在も被災の当時のまま残されています。当時この船には59人の方が避難し、船の上で生き延びました。船のすぐ隣の建物は写真展示室になっており、震災直後の街の様子を写した写真が展示されています。



Kapal Terapung ~カパール・トゥラプン~

震災当時、沿岸から6km地点の海上から市内の中心部まで流され、津波により流された発電船「カパール・トゥラプン」は被災後動かされる事なくそのままになっていました。現在は船の周りは観光地化されお店等が立ち並び観光客が多く訪れていました。



Mesjid Baitur Rahim ~バイトゥル・ラヒムモスク~

津波で亡くなった方々の遺体の写真を展示しているモスク「バイトゥル・ラヒムモスク」。モスクの中に被災当時の被害者の様子や遺体等々の生々しい写真が数多く展示されていました。研修生たちは日本では見られない光景に言葉を失っていました。



Makam Massal ~マカム・マサル~

アチェ州には津波で亡くなった方々の遺体を埋葬している「遺体埋葬所」が点在しています。その中でも一番大きな遺体埋葬所である「Makam Massal」を訪れました。ここには46,718名の方々が埋葬されています。熱帯地域のインドネシアは遺体の腐敗が早く、身元が分かっている方もわからない方もまとめて土に埋められました。



津波ミュージアムのスタッフが自身の被災体験を語ってくれました。現在、Kapal Lampulo (カパル・ランプロ) がある場所に当時は彼女の家が建っていました。研修生達は真剣な表情で語り部の言葉に耳を傾けました。



津波ミュージアムスタッフ
ガヤさん

私は、ここにある船のお陰であの日の震災から生き残った59人のうちの1人です。今皆さんがいる場所に、以前は私の家がありました。震災が起きた当時、私は22歳でした。2004年12月26日の朝の事です。あの日の事を私は忘れる事ができません。今までに聞いたこともなく、考えた事もない、信じられない事でした。それが地震と津波でした。日曜日の早朝、スマトラ島をマグニチュード9.0の大きな地震が襲いました。

私はその当時家族6人と一緒にいました。家族で家にいると、地震が起こり皆パニックになりました。そして家族全員で家から飛び出しました。そしてもうこれ以上何も起こらないようにと祈りました。私はとても怖かったのでそこから走って逃げたいと思いましたが、あまりの恐さに逃げられませんでした。私の周りにもその場所に座り込んでしまい、そこから動けない様子でした。

地震の揺れは最初に5～7分も続き、その後も余震が続きました。家に入ってみると、物が沢山壊れたり割れたりしていて、今まで見た事もない様なひどい状態になっていました。

その日、前日から妹(当時15歳)の友達が私達の家に遊びに来ていて、その友達と一緒に家を片付けました。少し家を片つけた後、妹は友達を見送りにバイクで出かけて行きました。それから20分後、漁港の方からたくさんの人たちが走ってきて「波が来るから逃げろ」と叫んでいたのが、家にいた私達家族は2階に上がりました。



▲被災当時の Kapal Lampulo

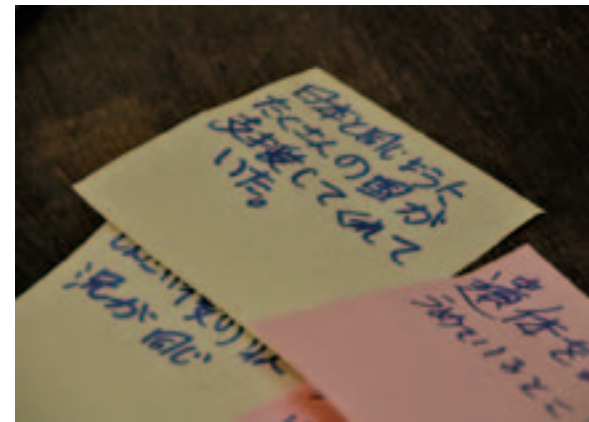
2階から外を見ると、黒い水が襲ってくるのが見えました。それからたった数分の内に私の首の高さまで水が上がってきました。どこに逃げれば良いかわからず私はパニックになりました。その時ちょうど船が流れてきました。兄の呼びかけにより皆で屋根をつたって、その流れてきた船に移りました。船の上には、息を引き取った1人の小さな子ども以外には誰も乗っておらず、これは神様が送って下さった船なのだと思います。結局59人がこの上に上がり、5時間以上船の上で過ごしました。

その後、船の中に穴が開いたらしく、水が入ってきている事に気が付き、危険だと判断して船から降りましたが、その時もまだ腰まで水がありました。家族皆でモスクに向かって歩きましたが、道中には沢山のがれきや遺体がありました。そして結局、妹は海岸から離れた場所で遺体で見つかりました。

津波は神様が起こしたことから仕方ないと思います。しかし、この経験を忘れないようにするためにはどうしたら良いかという事を今でも私はよく考えます。



バンダ・アチェを回った翌日、今まで見てきた物や感じた事を皆で共有するために研修生全員でワークショップを行いました。最初はブレインストーミング法で意見を出し共有した後、研修生各々が特に心に残った事や他の研修生に伝えたい事を発表しました。



当時のものを残すというのは忘れられない様にといいのもあると思うけど、思い出したくないのもあると思うから、どちらが良いんだろうか。自分は嫌だと思うけど、後になって残しておいた方が良かったと思うのではないかと。(松澤広夢)



バンダ・アチェは震災で亡くなった人や被災した人の気持ちを理解できるような場所が沢山あった。自分が住む釜石にも同じような場所があれば良いと思った。(奥村乃絵)



日本は高台に移転しようとしているけど、アチェはしてなかった。発展した町は必ず海の近く、暮らしやすい。それは日本と同じだった。(佐々木志帆)



津波の被害を次の世代に伝えようとしているのは同じ。日本と違う点はモスクで当時の写真を見た時に、遺体を重機で扱っている事。遺体の数の規模が違うので仕方ないのかもしれないけど、日本では丁寧に遺体を扱うのは当たり前。(刈屋知子)



昔のアチェには津波から逃れるための高床式の住居があった。欧米からの文化を取り入れずに伝統がしっかり根付いていれば、津波から逃れることができたのではないかと。(服部なみえ)



イラさんが遺体の写真を公開しているのを嫌な気持ちになるって言う。嫌だと思ってるのに写真を公開するのは疑問が残る。(藤原果奈)



お墓が一人一人ではなく、大きな場所にまとめて埋葬されているのが衝撃的だった。亡くなった方達には今後も安らかに眠って欲しいと思う。(佐夫真琴)



日本では遺体の写真を出さないし、あまり見たいと思わないけどインドネシアでは展示してある。現地の人達はどう思っているのか、嫌だと思わないのかと思う。(五十嵐真帆)

研修生からは、特に被災地の遺構を積極的に残しているアチェの現状についての意見が多く発表され、この問題意識が3日後のディベートへと繋がりました。

バンダ・アチェからバスに乗って6時間、沿岸の道を南下してムラボという地区を訪れました。バンダ・アチェと同様、ムラボ地区も2004年のスマトラ島沖大地震で甚大な被害を受けた場所です。

ムラボ第一高校

ムラボ第一イスラム高等学校(生徒数約800人)を訪問。同校の先生や生徒の皆さんから大歓迎を受けました。更に、校内で開催された交流式典には西アチェ州知事も出席し、盛大なイベントとなりました。



州知事より歓迎の挨拶

ムラボへようこそいらっしゃいました。この様な大きな式典が私達と日本の方々との大きな架け橋となり、防災の充実や地震に対する経験、そして常に災害に備えたり、犠牲を最小限にする事について皆さんと一緒に考え、そして日本の研修生の皆さんがそれぞれに復興への答えを見つけ出される事を期待しております。

～中略～

皆さんもご存じの通り、2004年12月26日にアチェを襲った地震と津波はこの100年で最も大きな災害でした。この災害によって建物、市民、数えきれない尊い命が失われました。死者と行方不明者は10万人を超えます。その後、数多くの復興事業が長い時間と膨大な費用をかけて行われ、国内外を問わず大規模な援助がこの地に流れ込み私達は困難な時期を乗り切ることができました。日本からも多くの支援を頂き、住宅地も学校もインフラも、隅々まで支援が行き届きました。

インドネシアだけでなく、タイやインド、スリランカで同じ様な被害をもたらしたこの大きな自然災害は、助け合う事の大切さを教えてくれました。2011年に起きた東日本大震災は、我々アチェ住民に2004年の地震と津波の恐怖を思い出させました。同じ自然災害を経験した国同士、地震や津波の経験を活かし互いに情報を共有し、今後の災害に備えられるように自ら発信していきましょう。

遠い日本からこの地に来てくださった皆さん、是非アチェの自然を楽しんでいってください。最後になりましたが、この様な場を作ってくださったすべての皆さんに御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



西アチェ州知事 Bapak H.T. ALAIDINSHYAH



学校関係者と学生達



民族舞踊の披露



研修生によるソーラン節披露

研修生によるプレゼンテーション②

in ムラボ第一高校

ムラボ第一高校ではCグループがプレゼンテーションを行い、代表して梅木理沙がスピーチを行いました。

梅木理沙スピーチ

※インドネシア語スピーチ省略(Aグループ松澤広夢と内容同じ)



私たちは2年前の3月11日、あの東日本大震災にみまわれました。1000年に一度と言われた大震災は多くの人から大切なもの、大切な人を奪いました。そして、心に大きな悲しみを残しました。私は当時中学2年生で、子供の自分が出来ることはないかと、ただただ考えていました。海の方に住んでいる友達や親戚の安否を確かめることもままならず、学校で出来る小さなボランティア活動が私にできる精一杯のことでした。

そんな中でも、たくさんの人の協力や、「復興」へ向かう多くの気持ちにより、徐々にまちは落ち着きを取り戻しています。

まだ、建物は建てることはできず、住んでいた人達が戻ってこれるというわけではありませんが、少しずつ、着実に復興は進んでいます。いつか、何年かかるか分からないけれど、元のまち並みに戻ることをみんな祈っているし、そのために出来ることを、一人一人が頑張っています。

私はここ、インドネシアにくるまで、とても楽しみにして来ましたが、どんな文化があるのか、まちや人々は何の様な感じなのか……そして、復興はどの様に進んでいるのか、と。実際にインドネシアに来て、瓦礫がほとんどないことに驚きました。私達のまちの瓦礫はまだ半分も処理されていないので、インドネシアのように、早くまちが少しでもキレイになって欲しいです。

Cグループ プレゼンテーション

Cグループは被災体験に加えて普段の学校生活を紹介したり、バンダ・アチェで見た遺構やモスクの事にも触れて発表しました。最後に一人一人が今後の抱負を述べました。

- *少しでも早い復興を目指して、やれる事は何でもやりたい。(小原)
- *津波の経験を継承して、故郷を以前よりもより良い町にしたい(佐々木志)
- *アチェで私達が今できる事を学び、帰国後生かしていきたい。(梅木)
- *学校に普通に通える事は素晴らしいことだと思う。その気持ちを忘れずに過ごしたい(岩間)
- *インドネシアで学んだことを自分の町の復興に生かしたい。(五十嵐)
- *復興のために一生懸命に学び、今回の経験を日本人達に伝えたい。(信夫)



グッドネーバース・インドネシアのムラボ事務所に勤務するイラさんから、被災当時の話を聞きました。

地震が起きた日曜日の朝、私は病気の母をバンダ・アチェの病院に連れて行ってたためこの家に居ませんでした。父や他の家族は家にいました。私はバンダ・アチェのまち中で大きな揺れを経験しました。地震の後、皆が「水だ！水だ！」と大きな声で叫んでいたのも、私は必死で逃げました。高台のような場所に置いて後ろを振り返ると津波によって沢山の人が流されていきました。



グッドネーバース
ムラボ事務所 イラ

私はやっとその時に何が起きているかがわかりました。その後、バンダ・アチェの街中で一週間過ごしました。喉が渇くので、夜寝る時は雨が降った時に少しでも水分が口に入る様に口を開けて寝ました。

一週間後、私の家のあるムラボが壊滅的な被害を受けた事を知りました。父、姉や親戚は結局見つかりませんでした。辛かったけれど、事実であればそれは受け入れなければならないと思いました。

津波から一ヶ月半程バンダ・アチェの仮設住居で過ごした後、ムラボに帰りました。私の住んでいる地域は、そこに何があったのかわからない程何も無くなっていました。道路が寸断され自分の家があった場所に自由に行く事ができなかったのも、隣まちのシェルターでの生活を余儀なくされ、その後も2007年まで仮設住宅で暮らしました。

今住んでいる家は、元あった家と同じ場所に建てました。この場所に再び住みたいと思ったから戻ってきたのです。隣の家では誰も助かりませんでした。だから家もそのままになっています。

昔は海とこの家の間に多くの家やお店が並んでいましたが、今は何もないので海だけが見えます。そこに住んでいた人は、他の地域や以前は田んぼだった所に引っ越ししました。



イラさんの家。以前と同じ場所に家を建てて生活しています



イラさんの家周辺の風景



家のそばには綺麗な海が広がっていました



震災後久しぶりに海の近くにきたという研修生も

研修生からイラさんへの質問

梅木：この家の周りがある木々や緑は、震災前からあったものですか？

イラ：ヤシの木以外は津波で流されたので、新しく植えられたものです。ヤシの木も、津波の前はもっとたくさん生えていました。

菊地：新しい道路になって住みやすくなりましたか？

イラ：交通が簡単になって、便利になりました。以前と比べてまっすぐで広い道になりました。

小原：お店等がなくなって寂しいですか？

イラ：元々は賑やかな道路だったので寂しさを感じます。私自身もこの家（この場所）に戻る事をすぐに決められたわけはありません。海が近いので、戻ることには迷いがありました。以前は軍隊なども駐在していて賑やかな地域だっただけに今は寂しいです。

坂本：この辺一帯の町は、以前と同じくらいに戻りましたか？（復興しましたか？）

イラ：以前とは違います。前にあった田畑が住宅になりました。それから、家の形や屋根の形、大きさや素材も以前は色々なものが並んでいましたが、今は支援で同時に建てられたので、同様のものが並んでいます。国内外からの様々な支援によって道もでき、良くなりました。でも、津波前はこのような暑さはありませんでした。地盤も沈下しています。

信夫：今この地域には何人くらいが住んでいるのですか？

イラ：今は1100人ほど。元の人口とあまり変わりませんが、人は変わっています。今は漁業関係者が多く移り住んできています。

佐藤：次に津波が来ても、またここに住もうと思いますか？

イラ：もし津波がまた来たら、ここはまた壊滅すると思います。でも私は神を信じています。私達自身も、この前の経験から学び、どうするべきか分かっています。震源地の情報を聞いて逃げるかどうか判断することができます。一ヶ月ほど前に、マグニチュード6.7の地震がありましたが、その時は逃げる用意は全てできていました。津波警報が解除されても夜は不安でしたが、こういう場所（津波が来る場所）に住んでいるのだから、用意はしっかりとすべきだと自覚しています。



最後に、イラは研修生達にこんなメッセージをくれました。

「皆さん、絶対に自然災害を恐れなくてください。でも、もしもの時の準備を怠ってはいけません。どこに行っても自然災害は起こります。山では噴火があるかもしれないし、川に行けば洪水や鉄砲水が起こるかもしれない。被災直後、地震の夢を何度も見て、慌てて起きて走り出したこともありましたが、今はもうそんな夢は見なくなりました。皆さんもつらい経験をしたと思いますが、皆さんはまだ若いので津波に負けずに未来に向けて歩いてほしいです。私はこれからもここで生活をします。生まれ育った場所を離れる理由はありません。」

自分が生まれ育った場所が特別だという想いはインドネシア人も日本人も同じ。イラは自身の体験を通して、研修生達に自然と共に生きる事の大切さとその覚悟を教えてくださいました。一方で、その体験談から津波に対する考え方の違いも浮き彫りになりました。イスラム教徒が大半を占めるインドネシアでは、津波は「神様のおぼしめし」という考え方が主流です。日本ではあまり聞いたことがない受け止め方や価値観に、研修生はインドネシアと日本の「違い」を知りました。